四万十町の光を発信す

## で 5 人 と 02 TAKE FREE



古い記憶のかけらを紡ぎ出す Kankan



志和の漁業の現在 … 03

特集 アンティークショップKanKan堂… 06

実地調査!四万十町のへんろ道… 10

高知で一番ながい歴史をもつ夜市 … 12

この街にはいろいろな光がある 大きいものから小さいもの、強いものから弱いもの そんな光の反射角度を変える 私たちだからこそ見える光を発信していきます

> りぐる「念をいれる」 時には全力をだして 時には肩の力をぬいて 右に左に傾いて それでいいんだ りぐらんと りぐらんと

# こここの語なつくる 志和地区漁業の現在

### 海が弱っている?

四万十町は、海もきれい。窪川駅から車でおよそ30分、くねくねとした峠をくだった先にかつて商業港で栄えた志和地区があります。海、山、川といった自然の恩恵を受けるこの地を「桃源郷」と呼ぶ人たちもいます。そんな志和の地名は海が語源と言われています。礁のある裏礁の上に波がくだける礁波(しわ)が、いつしか志和になったと伝えられているのです。しかし現在は温暖化などの影響により、海が弱っているとニュースで目にします。こうした現状を誰よりも知っているのは漁師たちです。今、志和の海はどうなっているのでしょうか?

### 獲らない漁業へ

「魚介類の住処となるサンゴ礁や藻場が少なくなっ たことで、以前のような漁獲量はない。 志和の漁師 も高齢化し、ずいぶん衰退してきた。だからこそ今、海を守っていかなければ」そう話すのはベテラン漁師であり『志和藻場を守る会』(以下、『守る会』)の代表でもある山崎規久夫さん。メンバーの多くは漁師です。魚介類の数を増やすため、「獲らない漁業」を行っています。主な活動は藻場の保全。藻場の設置や、食害生物の駆除に注力しています。

### 藻場はどうやって増やす?

海底から海藻類が消えていく「磯焼け」から守るため、人の手によって海藻の移植を行い、新たな藻場をつくりだす藻場造成。しかし、移植した海藻が魚やウニに食べられたり、環境に適合せず枯れてしまうといった課題もあります。適切な藻場造成のために漁師たちの経験や知恵がいかされています。







### 『藻場造成』

- ①まずはモトとなる藻を志和の海から採取 ②藻はネットに入れ、海中に吊り下げる この藻が胞子を飛ばすことで、周辺の藻場 を修復・再生することを目指す
- ③定期的に周囲をモニタリングし、今後の活動にフィードバック

### ウニを駆除する日

高級食材のひとつであるウニ。まったりとした口当たりと磯の風味がおいしい海の幸ですが、『守る会』では数日に渡ってウニの駆除をしています。ウニは大型海藻をエサとしているため、ウニの駆除は藻場の維持にとって極めて重要です。

厚さ5mmのウエットスーツ、7kgの重りに身を包んだ中野正延さんは、普段は『中延商店』を営んでいます。漁業者ではありませんが、メンバーとして自身も潜ります。夏場に5mmのウエットスーツをあえて着る理由は「波が荒れて岸壁へ叩きつけられることもあるから身を守るため」と話します。それだけ過酷な状況でもある現場に、参加させていただきました。

### 潜水の現場

『守る会』の活動面積は約9.2ha。7月中旬、普段はめったに誰も踏み入らない鶴津の海に潜りました。鶴津は志和と興津の中間に位置する無人エリアです。海の中は、残念ながら藻場の姿をちらほらと見かける程度。しかしウニの生命力はすごかった。岩場の隙間や、石を裏返したところにたくさんいました。何度も足元を取られそうになりましたが、小一時間で40個ほど集まりました。他にもニナ、シッタカ、ナガレコなど貝の姿も多く見かけました。

今回は足がつく岩場での作業だったため、 素人でも駆除ができましたが、潜水となるとそう上手くいきません。

ちなみにこのウニ、志和では食べる習慣がないのです。ウニ割をしてみてその理由が少しわかりました。味はとてもおいしいのですが、可食部分が小さくて少ないのです。例えば軍艦巻きを一貫つくるためにはウニを15~20個くらい割る必要がありそうでした。

### イセエビはどこへ行く?

志和を代表するイベント『志和ふるさとまつり』でおなじみのイセエビ汁。このイセエビは志和で生まれても、そのほとんどがいなくなってしまうのだそうです。 大事な資源であるイセエビを志和で育てたい!そこで、『稚エビの漁礁』がはじまりました。

そもそもなぜ、イセエビはいなくなるのでしょうか?実はこのイセエビ、幼生期の約半年間、海中を浮遊・遊泳しています。フィロゾーマ幼生という体長1.5mmの浮遊幼生期を経てプエルルス幼生(別名ガラスエビ)という画像の状態になります。これらの幼生は漁礁が少ない海の場合、着底せずに流れてしまいます。着底後、稚エビになります。



さらにフィン、シュノー ケル、水中メガネを装着 する



ウニは渡船「くろはえ丸」 の船頭が撒き餌釣りのエ サとして再利用



ガラスのように透き通っ て美しいプエルルス







### 『稚エビの漁礁』

- ①漁礁は志和で刈り取った杉の枝を使う②幼生が留まりそうなポイントにブイを付けた漁礁を吊るす
- ③漁礁も定期的にモニタリング。稚エビだけ ではなく、モイカが卵を産み付けることも





『志和ふるさとまつり』 大満足のイセエビ汁!



年2回以上の発行。購読料 は送料込みで2年分1,000 円。ご希望の方は下記へ 〒786-0056 四万十町志和416 志和活性化協議会新聞部会

んだ『志ぁ和せだよ<mark>り』は</mark>

## 志和の人々による地産地消の祭典

山崎さんは、漁業が活性化する方法を模索しています。例えば『志和ふるさとまつり』もその一つ。志和で獲れた魚介類をアピールするために山崎さんたちが『志和こんぶまつり』という名称で平成12年からはじめたものです。イセエビが半身も入ったイセエビ汁のもてなし、浜辺のバーベキュー、クルージング、海の幸の大バーゲンなどで志和の魅力を伝えています。

『志和こんぶまつり』が『志和ふるさとまつり』へと名称変更されたのは第13回目から。理由は、志和の昆布が減ったからだそう。おや、北海道ならいざしらず、志和の比で昆布?その謎は地域新聞『志あ和せだより』第2号に詳しく書かれていました。元々志和の昆布は、北海道から移入されました。平成9年頃、「昔は多かったアワビを復活させよう」と、エサとなる昆布の養殖を開始。すると、初年度になんと1トン近くも水揚げされ、こじゃんと美味しかった。そこで昆布を活かして志和を活性化させようと、ふるさと再生事業の支援を受けて『志和こんぶまつり』が誕生。名前は変わっても、おいしさは変わりません。

### 未来の漁業とは

「海を変えるのは本当に大変だ。こうした活動を続けても、俺らが生きてるうちは変わらないかもしれないけど、未来の海につなげていきたい」そう語る彼らの目は誇らしげでもありました。

志和漁業の今から、なんだか未来の漁業の あり方が見えてくるような気がしませんか? (津島沙織)

### 『志和ふるさとまつり』

日 時 2016年11月27日(日)10:00~

会 場 「志和海岸」四万十町志和

アクセス 高知自動車道中土佐ICから車で約30分

無料駐車場有

●志和港クルージング(雨天中止)

お問合せ 志和ふるさとまつり実行委員会

0880-24-0203(高知県漁協志和支所内)

●餅投げ(13:50頃~)



『志和藻場を守る会』のみなさん(敬称略)

手前左から:中野正延、山野上伸一(副代表)、山崎規久夫 (代表)、山野上哲夫、森田健二

奥側左から:森山雅之、森田祥二、山下きよのり、山野上祥 介、山野上皆生



物語を重ねてきました。 時間を人間に寄り添い、それぞれが違う 物は、嬉しいとき、悲しいとき、様々な 店が静かに佇んでいます。商店に並ぶ品 ていくと、大正地域に入る手前にその 号線を四万十川の風と共に下

んにお話を伺いました。 k a n k a n 堂」ご主人の高橋正 今回はそんな物語の語り部 伸 商

柵

に

囲

を迎えてくれました。 も超えた大小さまざまなアンテ るべく跨い たびに不思議 くすぐられた好奇 物が確かな統 つ古民 あ いたかも お店だろう?木製の だ敷 家の前を車で通り に 居 思っていました。 小さな牧場 の先で、 心の正 感を持って私たち 体を 年 0 -代も よう イ 確 か 国境 な外 か か る め

で生まれました。 抜け出してきたかのような世界観 橋さんは したのが高 昭 橋 和 32 正 高 年に高 知 伸さんです。 屈 0) 絵本 指 日知県佐 の 歴史ある 0 中 を 川 か 作 町 5

高橋正伸さん

大学の土木科で道路や土地の幅を測る学生の実習用に 使用されていた。水平メモリなど全てアナログ製。遠 くのものを映し出す望遠レンズは月面のクレーターく らいなら観察できるので、天体観測をするために用い ても良いだろう。



以前の持ち主であった工業高校電気科の先生が大切に 点検・整備を行っていたため現在も使用可能なほど状 態が良い。ラジオの時代が終わり、持ち主がいなくなっ た後も変わらず必要とする者に情報を届けてくれる。



フランスのミューラー兄弟が 1900 年代初頭に制作し た作品。現在は作られていない貴重なウランガラスが 使用されている。店主の手によって日本の電圧でも使 用できるよう修理が施され、再び柔らかい光を灯すよ うになった。

た。 لح 付 最 か 0 受 物 < < 意 力 た W < きました。 b け を 0 大 頃 な 出 味 VI VI 会っ 0) ع ほ 修 だ 気 は ることは 人を惹きつ \$ 力 ح 継 そう 2 魅 理 か に ま II あ 0 0 V た品 す。 力 笑 L 5 入 るそうで は 思 距 で は む て な つ V 中 離 W V ご主 る て う 高 次 な 物 国 ま か 2 け愛され 橋 世 < に 語 気 V 5 感 7 く使える状 さ す。 人 代 れ 持 0) 愛 で k ほ 0 た 着 に ち で W 18 a し 渡 新 す 空 人 に b が お 今では n る場 V 柄 L た あ か わ ダ VI 気 k لح ? て に k な 2 V で 0 a 所となり 答 · と 尋 感 あることに 態 持 V た て a 名 お 名 n え 手 け き で、 ち 堂 VI 前 n 前 ٤ て た 主 を n ね 放 に k 0 < ど今 る 4 名 壊 に V L ま 通 大 ع n n 大 بح た り ح な 付 切 n L < 柔 ま 事 気 堂 た は た VI 2 け 5 若 多 た に 品 な 5 た

> タ ビ ユ 1

けて てい れ か 子 た に イ 供 人 V ま 語 ŋ ン に の 、ってほ す。 けた先 ってく 諦 頃に なる め たり بخ 感じ 元でし L れ V た 0 た 仕 か 見 言 最 て 好 事 葉 後 L Þ き れ が に ま 生 な な 高 5 活 7 ع 人 b に さ 面 が は 追 印 N 白 V わ が 象 V る 世 れ 2 に に け 界 て لح 残

P

つ

モノづくりのきっかけはひとつのフックから。 サラリーマンをしていた時に、お客様に自作 のアンティーク風のフックをプレゼントした ところ大変好評で、それからいろいろなモノ を作る楽しさに目覚めていきました。

年 ま

H

け

な 後

が

5

結 ゥ

婚

子

育

W

そ

0 ち

は 犬

ス 学

X

力 に な

1 九

0

営 12 き

業 移 良

職

を 住 景

20

ツ

1

12

出

品

L

7

V

5

ち

普

どこ 1

" T 以 す

コ

"

ع

を

物

フ

1)

7

テ

1

1 収

ク 集

は

子 行

供 2

0 た

頃 品

か てを

5 を

興 行

味

が ま

あ L

n

品

買

うことが

で

きる <

V

加 で の酒

育 持

進

を 0

機

州

n き

7 観

蔵 中

を

り

町

連

る

占

n 忘

ŋ

ますよ

町 か 町 場 L 構 Ų 商 ケ コ

新たな光が灯ることになったのです

月

蕳

改 き

装 家

を行

こうし

ま

らたひ 自

ځ

2 丰

四 で

万

+ 4 +

0) 所

空 を V

に

出

会

V

ま

L

た。 て

5

0)

約 万 た 充 店 増

探 < 運 客

たところ、

縁 が

あ 手

つ 狭 そ 高 か に

て

現 な

在 ŋ 商 内 う 段

0

四

7 え

に

2 ح に

れ

て

お

店

ح

新 が

な 実

る

び

な

ŋ 要

´まし へとさ

た。 れ

0) 知 ع

後 市

品

お を

様

必

7 0)

に 声 は

お が

を

### い な 5 作 n ば 良

売する 隠 b 5 0 品 世 様 時 ま に 0 高 ヴ す。 ま ح を 橋 な せんでした は 佇 重 ブ さ 1 1 全 ま ね 約 h < た ス テ 7 は V とな 気 に 本 1 坪 物 が 物 ジ 語 ほ تلح 付くことができず、 説 0 2 加 0 T 明を受け アンテ 工 0 作 V を ŋ 離 ま 施 手 n غ 1 す。 L に る L 1 た は まで ク ま て 作 高 品 る 品 橋 0 作 بح で さ を 鷩 見 b 数 展 N 丽 だきを れ 間 + が b 示 た 違 新 年 販 あ

なら し 高 した。 価 1 b 作 で ブ ともとは年 揃 ル n ば え が 良 る 無 か V 0) ع が 2 代 た、 難 V 物 5 L の 思 ま か テ らたは V つ 1 たことか で 1 制 あ 作 力 つ ツ てもとても を プ 開 5 始 L 無 合 ま

と眺 ると どとれ L 高 め < V 橋 て \$ V 適 さ L ま 当 魅 h ま す に 力 は 的 N が 作 あ ま で 9 ま す。 思 た 1 ŋ わ 寧 方 細 ず に が か 手 仕 案 V 外 に 事 こと 取 が 良 施 2 V は てじっ さ b 気 ħ 0 K た が Ź で 品 き 物

は

た着 の お テ ŋ 方でも安心して楽しむことができます 1 今 色 で Ì を は な ク 施 る 風 お べ に 客 て < 様 ブ 1 蜜 口 か るとのことで、 蝋 デ 5 など 持 ユ Ì ち 0 ス 込 す 天 ま 然 る れ た 仕 素 ア 家 材 事 を b 具 ル 使 を 行 ギ 用 つ ア 7



け て 私 V な た 錯 る ち が 覚 0 経 に 寿 陥 に 命 0 ŋ 囲 0 が ま ま 数 らす。 長 ħ 倍 た f ょ 非 0 5 日 時 常 間 を 的 短 な b よう 間 生 に

V

声 け 過 が 去 ま ょ て 例 モ Š ざ 聞 え き 0) ま 手 ば 延 0) て 入 え な 持 V 長 ħ て る 線 感 つ 五. をされた真 き 月 0 ŀ. 覚 多 ま を を 様 雨 か 生 引 な 0 記 き金 午 L き て 後 れ 憶 空 ま に が V 一管 る 古 せ し 視 て、 0) h 覚 V ラジ だ 放 聴 ょ 7 私 ぼ オ بح た ち か 語 h P 5 n は 音 か ŋ

赤 橙 色 ととぎれとぎれ に 聞 こえ てくる

> な、 た 作 に 声 2 品 \$ そ た 過 に、 私 h 去 今 た に 現 な 変 ち 瞬 代 は が 化 が 間 な 0 出 を 生 に 時 W 来 きて 立 新 間 上 げ ち た 軸 が ま 会 な V 0 イえる つ < 色 情 た た。 た 彩 か め 感 を が 0) ま O 動 帯 付 は ょ る 重 び 加 5 た 要 意 で さ

て な b る ゆ 部 に さ 根 お そら くことで 分 生 まざま 拠 ح ま 見 な れ たこ る 変 な L わ モ 今 か ょ لح ŋ b 何 b 0) 気 L な な れ 私 V た < ま つ 11 ち か せ 彩 通 ŋ 0 思 n h を 渦 心 W 滲 0 出 ぎ 白 ع ま て ع せ 紙

kankans

行 か あ なた きませ け を h 集 k か? め a て k a た n な 堂 物 で 語 古 を V 紡 記 憶

0



### 看板犬つよし(1歳)

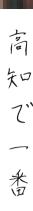
保健所で殺処分寸前のところを高橋さんに助け出されました。 今では近所の人がつよしに会いに野菜を持ってやってくるほど の人気者。決して吠えず穏やかな性格で、最近の楽しみは川の 向こう岸の友達の犬の家へ遊びに行くことです。

KanKan 堂

高知県高岡郡 四万十町希ノ川 310-2 店舗前に駐車場有

لو

問制/10:00~18:00 定休日/火·水曜日 090-8699-2078



長い歴史をもつ一夜市

祭り騒ぎ』。 り「酒だ宴だ」とまさに毎週『お夜市には、夜な夜な人々が集ま 年で47回目。高知県の夜市の中

開催されている金太郎夜市は今

古くから7月の週末になると

では最も歴史が古い。

今回はそんな金太郎夜市が生まれた頃について調べてみた。ことの発端は昭和46年。「夜のは当時窪川町商工会に勤めていた佐々木暁夫さんをはじめと 12

当時の窪川町商工会会長、長野和一郎さんが愛媛県の出身で、「愛媛で夜市をやりゆうがで、「愛媛で夜市をやりゆうがで、「愛媛で夜市をやりゆうがれど、面白いきいっぺん見に来てみんかよ?」と彼らに声をかけたのが始まりだった。それを聞いた佐々木さんたちはすぐさま車に乗り込み、向かったくさま車に乗り込み、向かったたは愛媛県の宇和島市。

車にギュウギュウ詰めになってり、「大きな男が3人、小さな佐々木さんは当時を振り返



なっていくのであった。 無くてはならない夏の風物詩と して、窪川地区の人々にとって それが後に「金太郎夜市」と



おかさん」へ足を運んだ。 本町にある「フルーツ&フード にこやかに迎えてくれた山岡さん やま

それは6月の暑い日のこと。私は

くれた。 は当時の夜市について丁寧に話して

よ。 てしまうのは一番良くないと思うが と大きくしていった方がえいと思 これからは外へのアピールももっ 思うで。けんど、 見慣れたよぉなもんが多くて昔みた らがあると思いよったけんど、 ちょったき、夜市へ ころと協力してできたらえいねえ。 市はほんまによおやってくれゆうと いには思えんなったね。でも今の夜 よったねえ。そりゃあ賑やかやった てねえ。今はもう出てないけんど、 こそ自分の店の前に商品並べて売り 吉見町でも店が出ちょったで。それ 夜市を始めた頃はお客さんも多く す必要があるねぇ。マンネリ化し 付加価値を付けて特色をもっと 昔の夜市には商品が何でも揃 もっといろんなと 行ったら何かし 今は

色を示した山岡さん。 の夜市のマンネリ化に対し、不安の た 時代を生きてきた方だからこそ、 今の窪川の人口減少に加え、今後 活気のあっ

か

つての同志たちを思い静かに、

市を守っていくためには、 して今日まで47回続く夜 か。 今の町の静けさを痛感 7 13 私たちが窪川を、 るのでは だろう

佐 し始めた。 しむようにゆっくりと話 ね の佐々木暁夫さん」を訪 介してくれた「元商工会 々木さんは当時を懐か た。 次に私は山岡さんが紹 事情を伝えると

看板、 に行ったけんど、 落とされちょったことも 壊されちょったり、 立て看板は遠くまで立て らあで手書きしたねえ。 灯まで、 あったがよ。 「当時は横断幕から立 100個以上あった提 ほとんど自分 100個以上あった提灯 わざと 川に 7

んかった。」 ないろおかね。 おったき今でも夜市が続きゆうがや 汗をかいて頑張ってくれた人らあが つ手作業で取り付てね。こうやって は商工会青年部で手分けして一つず 決して一人ではでき

課題も多くあるようだ。

てくれた。 から当時の宣伝方法についても教え そして強く語った佐々木さん。

の人らぁは足が勝手に夜市へ くうちにその宣伝を聞くだけで地域 宣伝しに行ったで。 楽流しながら久礼やら佐賀へ向い 昔は車を選挙カーみたい 何年か続けて にして音 向 か

少しの沈黙のあと静かに口を開いた。 夜市を浴衣姿で歩きゆう光景がもう 「たくさんの親子連れや友達同士が から佐々木さんはこう続けた。 活させてみたらどうやおね? ん寂しい感じがする。 一回見たいねえ。」 そう言って寂しそうに目を伏せ、 原点回帰で復 それ

> てほ 張 れ 13 夜市を続けることによってそれぞ ね。 る源になってくれたらとても嬉し 0 商店の力になってくれたら、 商店はなんとかしてあり続け

頑

今はそんな宣伝が無い

H

うに活気のあった時代を生きてきた 佐々木さんもまた山岡さんと同じよ 店街に対する切実な願いであった。 佐 々木さんの口 一から出 たのは 商

を始 も相 見るの 街になりつつある商 ちょったってことながやお 親 が 7 考えていると、 本人らあはそればあ熱中し ゆう方は面白かったけんど、 はこう続けた。 の方が熱くなってケンカ が子ども のではないだろうか め 撲 それゆえにシャッター みじみとそんなことを たがよ。 が何とも寂 なんとおか や〜愉快やったで。」 ちゅう競技もあ 同士の試合やに 佐々木さん それこそ見 昔は子ど かった くつら 店街を

Vi

した。 時の賑わいが垣間見えた気が 佐々木さんの瞳の奥には、当 そう言って楽しそうに笑う

13

繋いでいくということは、これから 昔の窪川について知り、 機会も今はなかなか無い。 去の記憶を繋ぐことの大切さ」。 く感じたことがある。 なことではないのだろうかと思う。 の窪川を良くしていくためには必要 たちが昔の窪川について知るという たのだが、 生懸命生きていた人たちの記憶を こうして私の夜市取材は幕を閉 この取材を通して私 それは、 その時代を しか は 過 私 強

だが、 ば、 を動 締めくくることにする。 そんな願いを込めて私はこの記事を な人たちの思いを何らかの形で町 えなけ 町の人たちの 人たちに伝えることはできるはず。 てこの思いを一人でも多くの人に伝 にしてみようと思い取材を始めたの が鮮明に見えてきて、 最初はただ単に夜市の歴史を記事 と強く感じた。 かすことなど不可能だが、 伝えたい、 れば、 夜市について知れば知るほど 昔の記憶を繋げなけ 夜市や窪川に対する思 伝わってほし 自分一人では なんとか 様 R 町

には心より感謝申し上げます。 の方に伝わりますように。 かこの 取 材に協力してくださった皆様 方たちの思い が一人でも多く



**経典: 武庫東けん** 



関が動物った。



節 専門的(は・9月合併号)

